

晩年の鳶魚 下部での生活

仲澤 一美

一 不二ホテルとの出会い

三田村鳶魚はその最晩年にあたる約一年三ヶ月を、山梨県下部温泉郷のはずれにある不二ホテルで過ごした。下部温泉といえば武田信玄の隠し湯として戦国時代より知られる秘湯である。

翁と不二ホテルとの出会いは、昭和二十年三月にまで遡ることができる。はじめは湯之奥にある橋本屋という宿に疎開したのだが、学童疎開の子供たちの喧騒を避けるため、橋本屋主人石部氏の斡旋により、ひと月も経たないうちに不二ホテルに移ったのである。

『此宿所閑寂にして漸く平生の気分になれり。入浴。』（日記・四月十一日）

当時の不二ホテル主人は高野忠男氏である。家族は妻と五人の子供。そして数人の女中を抱えて木造二階建てのこじんまりとした温泉宿を営んでいた。高野家は過去に富士川の舟運業を営んでいた時代があり、人を泊めたり世話をしたりすることも多く、篤実な家風を備えていた。この疎開中に、忠男氏の長男で文学好きでもあった高野六衛氏が、なにくれとなく翁夫婦の世話をやいている。

翁が六衛氏の顔をはじめて見たのは風呂場であった。以降徐々に話をするようになって、その実直な人柄を好ましく思った翁は「面白い青年だ。ぜひ私に預けてくれませんか」と主人夫婦に申し入れたという。

昭和二十年十一月、六衛氏は翁夫婦とともに上京。翁の身の回りの世話をしつつ、しばらく書生のような生活をしていた。

昭和二十六年二月、鳶魚夫人の葬儀に出席した六衛氏は、ほとんど寝たきりになって身の回りの世話とて親身に行う人もない翁の有り様を見かねて、そのまま下部の自宅まで背負ってきたのであった。

今から書く三田村鳶魚最晩年の暮らしぶり
は、現在不二ホテル女将である高野弥生さん
（六衛氏の妹・当時高等学校生）、弥生さんの
弟・高野不二也氏、そして女中として働いて
いた鈴木百枝さんからの聞き書きである。

二 愛嬌のあるお殿様振り

不二ホテルは今でいう「はだかしま身延線」波高島」
駅より徒歩五、六分あまり。山女魚の棲む清
流常葉川に架かった橋を渡った先の二軒だけ
の温泉宿の、その手前の一軒である。当時、
この橋は川の中に数力所石を積み上げて、上
に板を渡したただけの実に簡素な造りであつた。
大きな台風が来れば、あつという間に流され
てしまう。

その橋を渡り、六衛氏が一人の見覚えのあ
る老人を背負つて帰宅した。何の前触れもな
く、突然のこの出来事に皆驚いたという。

「私を帰らせてください。どうか先生を看
てちょうだい」

東京から付き添ってきた女中は、継るよう
な目で訴えた。家人の顔を見れば帰らせてく
れと涙をこぼす。結局この人は三日ほどいた
きりで、逃げるように帰ってしまったという。

その後すぐ六衛氏も家族に翁を託したまま
再び上京する。

「六衛兄さんは先生を置きっぱなしだつ
た」

現女将・高野弥生さんはそう言って笑う。
弥生さんは当時十七歳、電車で二つ目の身延
高等学校に通っていた。

とにかく高野家では翁を引き受けることに
なった。部屋は一階で、家族の部屋と客室と
に挟まれた六畳の床の間付き和室。そこに地
元婦人会が作ってくれた厚さ三十センチもあ

る藁のベッドを据え、上に翁持参の布団を敷いて寝かせた。

ベッドを据えた場所は、家族の部屋に接した壁際である。翁は用があると壁をとんとん叩き、家人を呼ぶ。誰かが行ってみると襖の方には首を傾げて見ている。隣の部屋を使うことの多かつた弥生さんは何度も翁に呼ばれて行つたが、その時の首を傾げた様子は実に愛嬌があつたという。

翁の江戸っ子振り、高級嗜好振りは高野家の人々を驚かせた。よく訪ねてきた人物に地元新聞社の斉木逸造氏がいた。あるとき氏は大きな箱いっぱいビスケットを見舞いに送つてくれた。昭和二十年代前半、まだまだ食糧難の時代であり、菓子などめつたに食べることもできない貴重品だ。しかしそれを見せると翁は、「そんなもの、奈良のシカでも食べません。帳場へお下げなさい」と言つて見向きもしない。また、好物のひとつに卵があつた。ご飯より卵が好きといつた具合で毎日ひとつずつ食べたがる。卵も入手困難なので箸でふたつに割つて食膳に出すと、「ごまかすんじゃないよ」と家人は叱られる。世話になつてはいるものの気兼ねしている様子はなく、まるでお殿様のような風格があつたという。

翁の遣う江戸風の言葉も田舎の人々には耳新しかった。下部は山間の地である。冬は寒さが厳しい。翁は持参の布団の中にカイ口を入れて暖をとる。このカイ口を買うのは高校生だつた弥生さんの役目である。学校帰り、身延駅前通りにある回生堂で買うのだが、品切れの場合は少し離れた市川大門町までわざわざ出かけていった。

翁はカイ口を使い終わると布団から出し、その辺にぽいっと放つておく。弥生さんが気がついて「先生、火事になったら困るでしょ」と注意する。「焼けたつてもとっこだい」江戸

弁で返事が返ってきた。

寝たきりの翁の世話は女中の鈴木百枝さん（当時三十代中半）が主に行った。寝たきり老人の介護といえは今も昔も下の世話である。東京の女中に去られたあと、百枝さんはボロ布を長くつなぎ合わせて襦を幾枚もこしらえた。翁はいつも腹の調子が悪いうえ痔を患っていたこともあり、襦は何枚も必要だった。使用済みの襦はホテル近くを流れる小川で洗濯をする。日に何度も小川へ通ううちに百枝さんの手はひび割れてしまった。

だが、そんな風に甲斐甲斐しく世話をする百枝さんに、翁はたいそう信頼を寄せていたようだ。手をパンパンと叩くので誰かが部屋へ行ってみると、「お前さんじゃないよ」と言つて百枝さんが来るまで待つていることもあった。

風呂へつれていくのも百枝さんの仕事である。小柄な体躯にもかかわらず、百枝さんは翁を背負つて廊下を渡り玄関前の板の間を抜け、風呂場へ行く。百枝さんの背中で翁は「おつちよいちよーい、おつちよつちよーい」とリズムをとつた。

こんなこともある。甲府の「梅が枝」旅館の女将が見舞いに来た時、きれいに剃られた顎をなでながら「百枝さんに剃ってもらつたんだよ。今からおムコに行けるかね」と得意顔であつたという。「梅が枝」旅館というのは井伏鱒二や太宰治がたびたび訪れていた宿で、甲府の舞鶴城の南側、蓮池の付近に位置し、蓮の栄養が入るから良い湯だと云われていた。地元の人との交流もあつた。近くに住む高野進氏はウナギやドジョウを捕るのが上手くて、翁はこの人と話をするのをたいそう楽しみにしていたという。

翁が亡くなったのは、滞在十五ヶ月目の昭

和二十七年五月十四日である。枕許にいたのは高野家の家族と、近在の人で翁の話し相手をよくした高野智氏、下宿人で新聞記者の内藤氏、そして百枝さんである。その時、翁は舟に揺られる旅人の話をしていて、すうつと眠るように息を引きとった。

葬儀は近所の人々も参加して不二ホテルで行われた。導師は高野家の菩提寺・身延町下山にある龍雲寺第二十九世岳がくじょう乘和尚。その折付けられた戒名は嚴王院鳶魚玄龍大居士位である。亡骸はそのまま高野家の墓に埋葬された。小高い山の上の墓地へ続く道は、今でも車一台がやつと通れるくらい。その狭くて急な山道を、十人ほどの担ぎ手たちが交代しながら棺を山頂まで運んだという。その後十数年して縁者に当たる人物がやってきて骨を拾い、東京へ引きとっていった。

三 記念碑建立

現在、不二ホテルの庭には「三田村鳶魚終焉之地」記念碑が建つ。十七回忌に下部町で建立したものである。書は海音寺潮五郎。除幕式には親交の深かった井伏鱒二があいさつをした。

式典後の宴会でのこと、下部町から海音寺潮五郎氏へ書の謝礼として三万円が渡された。氏はその場で

「これは僕のもらうお金じゃない。苦勞したのにこの人はどこからもお金をいただかないんだ。だからこれは百枝さんにあげます」と言つて手渡したという。

「先生をこんなによく見てくれたから、今度は僕を見てほしいな」

井伏鱒二は冗談ともなくこんなことを言った。しかし百枝さんの回想によると、苦勞をし

たという思いはないようだ。「私は一生懸命だった。若かつたんだね、力もあつたし」そう振り返るだけである。今、百枝さんの手元に形見といえるものは何もない。爺のするお江戸話や夜の長き』と書いた短冊をもらったが、それもどこかへいってしまった。

百枝さんは現在九十五歳、十年ほど前に不二ホテルを退きしばらくひとり暮らしをしていたが、今は老人ホームに入っている。以前ひとり暮らしの家を訪ねたとき、本棚には中公文庫の三田村鳶魚全集やら様々な歴史書がずらりと並んでいた。暇さえあれば本を読んでいるのだという。

高校生だった一人娘の弥生さんは今も女将として采配を振るっている。平成十年にホテルを建て替え、重厚な構えのその日本建築は、地元の棟梁桜田氏によるものである。弥生さんのあとを継ぐのは弟・不二也氏の次男、慎也氏である。

歴史研究家や三田村鳶魚に関心を持つ人々が今も時折不二ホテルを訪れている。時間が許すかぎり、弥生さんはその人達に昔話を語る。湯量、湯質ともに下部一だと云われる不二ホテルを訪ねる人の中に、女将の温厚な人柄を慕ってくる人は多いのである。

今は亡き六衛氏が翁を背負って渡ったという木橋は、現在コンクリート製に変わっている。車一台やつと通ることのできる狭い橋だが、もう台風に流される心配はない。だから土地の人々は永久橋とも呼んでいる。

一枚の写真がある。十七回忌に井伏鱒二が記念碑の前であいさつをしているところだ。ちようど井伏鱒二の立っているあたりに、毎年夏になると桜花が一本だけ律儀に咲くのである。